

自然保護の窓

マダガスカルの自然環境と 原猿類の保護について

1988年11-12月にマダガスカルの南部と東部海岸のヌシ・マンガベ特別保護区をまわり、マダガスカルの自然環境と原猿類の保護の現状を見ることができたので、簡単に報告したい。

(1) 新種の宝庫

1987年、1988年と連続してマダガスカルで新しい原猿類が発見された。*Hapalemur aureus* (ゴールデン・バンブー・リーマー: Meier et al, 1987) と *Propithecus tattersalli* (ゴールデン・クラウン・シファカ: Simons, 1988) である。このように一つの国で、しかも異なる植生域で小さからぬ2種の霊長類が最近になって連続して発見されたのは、霊長類の発見史上でも稀なことではないだろうか?

ゴールデン・バンブー・リーマーが発見されたのは、東部の熱帯雨林の竹林であり、ゴールデン・クラウン・シファカは東部の乾燥森林という対照的な場所である。しかし、これらの生息地はいずれも小部分に分断されていて、発見された原猿類たちの将来は必ずしも明くない。この危機的な状況は、切れ切れの乾燥森林が集落・農耕地に囲まれているゴールデン・クラウン・シファカについては、ことにそうであるようだ。

ゴールデン・バンブー・リーマーの生息地ラヌ・マファナ (Rano-mafana) は、首都アンタナナリブ (Antananarivo) から南へ直線で260kmの東海岸沿いの森林のなかにあり、ここは特に地形が急峻で竹林が多い地域である。ゴールデン・バンブー・リーマーのすむこの森林には、他の11種の原猿類も共にすみ、*Hapalemur* 属の他の2種 (*H. griseus* と *H. simus*) も同じ場所にすんでいる。

私はゴールデン・バンブー・リーマーを2日間にわたって (11月14日-15日)、泊まり場から泊まり場まで追跡することができた。彼らの食物は

固有種のタケ (*Chephalostachium vigueri*) で、おもにその葉の葉柄を食べ、時に幹の途中から出たタケノコをその鞘を一枚一枚むきながら、その鞘ごと食べ尽くしていた。

しかし、この地域にも牛が放牧され、有用材はあちこちで切り倒され、村の近くから焼け野山が広がりつつある。この地域に林と動物が残ったのは、耕作地を作るには地形が急峻すぎたためと、この地域の住民であるベツィレオ族には原猿類を狩猟する習慣がなかったためであろう。

自然と人間社会の条件がうまくつりあって、いわば、かろうじて残されたこの地域を、マダガスカルで三番目の国立公園とするための事業が始まっている。

(2) 始まった国際的保護活動

1988年からアメリカ合衆国の援助を受けて、マダガスカル政府はラヌ・マファナの標高400m-1.500mの森林地域に40,000haの国立公園をつくる事業を開始した。このプロジェクトには、専門家として Duke University Primate Center の研究者が参加している。私たちが訪れた時には、かれらの調査基地となるコンクリート基礎で丸木作りの明るい小屋が完成したばかりで、それまで新種の発見者であるドイツ人の Meier らが住んでいた、バナナの葉で屋根を葺いた粗末な小屋とは対照的であった。

アメリカチームはこの地域にすむ原猿類のほとんどに首輪をつけ、すべての道に50mおきにテープをつけ、観察された泊まり場や食物はその場に (その木に) 印をつけ、霊長類ばかりでなく各分野の専門家を入れて、徹底的な野外調査を行っていた。

ここで原猿類を研究したり、観光に訪れる外国人相手のガイド組織をつくり、付近の住民は生計の新しい分野を開いている。かつて、優雅な保養地であったラヌ・マファナでは、この国立公園の設立とともに自然の保護と地域の住民の生活とが両立できそうである。

(3) 山火事は夜空を焦がし

ラヌ・マファナのような特別な地域を除くと、マダガスカルの自然環境の将来は全く楽観を許さ

ない。

マダガスカルは23ヶ所の特別保護区のなかでも最も小さな(520ha)、しかしアイアイの保護区として最も有名なヌシ・マンガベ(Nosy Mangabe)を私たちが訪れたのは、雨期に入った12月だった。山々の木々を震わせて襲う豪雨のわずかな合間に、本土でも半島部でも、森林を焼く煙が幾筋も立ち上っていた。時には、延々と連なる山火事の火明りが夜空に映える光景を見ることがあった。「もちろん、森に火をつけることは禁じられている」と、我らのガイドは言う。「しかし、この広い地域に森林局の監視官はただ一人。どうやって取り締まれるだろうか?」

それでも、中央高地や西部に比べると東海岸には森林が残っている。私たちが首都から南西部へ、5,000kmの旅をした間に見ることのできたままとまった森林は、サカラハの森林ただ1カ所だった。そのほかには、焼け焦げた灌木林と草地がみわたすかぎり続いていた。それは意気消沈させられる光景だった。千年間にわたって焼き尽くし、繰り返し焼き尽くして、大地の骨まで黒こげにして、しかも今なお煙が立ちのぼっていた。時速60kmで走っても、来る日も来る日も同じ光景だった。

(4) 残された自然林に緊急の保護の手を

マダガスカルに自然林がどの程度残されているか、その推定は難しい。全国土(587,000km²)の28.4%(125,000km²)がなんらかの森林であるとされている(IUCN/UNEP/WWF, 1987)が、その森林は年々減少している。

自然林の面積ははるかに狭い。手つかずの原生林の面積は、東部と西部では森林全体の面積の約16%と推定されており(IUCN/UNEP/WWF, 1987)、南部でも同様と仮定すれば、原生林面積は27,670km²となる。これに国立公園(PN)と厳正保護区(RNI)の面積合計10,347.8km²を合計して、約37,970km²、国土の約6.5%がなんらかのタイプの自然林として残されていることになる。

この自然林の割合は、人口10,012,000人、人口密度17.1/km²(1985年:IUCN/UNEP/WWF, 1987)の国での割合としては、決して高いとは言えない(ちなみに日本の人口密度は1981年で314/

km²、自然林を含む重要な植物群落の面積は、9,350km²、国土の2.5%とされている:環境庁自然保護局編, 1982)。この国の人口増加率2.8%(25年間で2倍)を考えると、またこの国土のほとんどがゆるやかな地形で、人がかんたんに侵入できることを考えるとき、この残り少ない自然林が非常に危機的な状態であることは明らかである。この自然林の中に育まれてきたマダガスカル固有の生命とその絶滅割合を考えると、その保護の緊急さは言葉の上だけではすまされない。

マダガスカルは10,000種の顕花植物のうち、その木本植物の種の94%までが固有とされている(Koechilin, 1972)。その動物相も固有率が高く、これまでに確認されているほ乳類72種(翼手目とドブネズミなどの移入種4種を除く)のうち70種、すなわち97%が固有種である。しかもこれらは、5世紀に人類が到着して以来、絶滅してきた多くの生物の残りにすぎない。キツネザル類だけでも絶滅種は14種(Tattersall, 1982; 現存種25種)、絶滅率は36%に達している。

新生代のすべての時代を、他の大陸から離れて独自の進化史の海を漂った、このかけがえのない生き物たちの乗る小さな舟は、今難破しようとしている。ここもまた、多くの熱帯の自然地域と同じように、救援の手が緊急に必要な地域である。

引用文献

IUCN/UNEP/WWF (Edited by M. D. Jenkins), 1987. *Madagascar, an environmental profile*. 374 pp. IUCN Gland, Switzerland and Cambridge, U.K.

環境庁自然保護局編, 1982. 日本の自然環境. 249pp. 環境庁, 東京.

Koechilin, J., 1972. *Flora and Vegetation of Madagascar*. In: "Battistini, R. and Richard-Vindard, G. eds., *Biogeography and Ecology in Madagascar*" pp. 145-190. Junk Publishers, The Hague.

Meier, B., R. Albignac, A. Peryieras, Y. Rumpler and P. Wright, 1987. *A New Species of Hapalemur (Primates) from South East Madagascar*. *Folia primatol.* 48: 211-215.

Simons, E. L., 1988. *A New Species of Propithecus (Primates) from Northeast Madagascar*. *Folia primatol.* 50: 143-151.

Tattersall, I., 1982. *"The primates of Madagascar"* 382 pp. Columbia University Press, New York.

(東京大・理 岩野泰三)